

小樽市の繁栄

私は43年間をアメリカで在住し、中学、高校、大学時代を過ごした故郷の地小樽を人生の最終地として選んだ。2008年の暮れに帰国し、早や一年が過ぎた。変貌した小樽、丸井が、ニューギンが、大国屋が、映劇が、電気館が、日銀が、拓銀が、消えていた。商大通りの入り口にあった富岡湯もなくなっていた。手宮線も消え、小樽駅から函館行き直通列車がなくなっていた。代わりに小樽運河街、長崎屋、小樽築港のマイカルが出現していて、小樽港には行き交う本州行きのフェリー船が入るようになっている。時には大きなクルーズ船も寄港する。しかし、未だに産業会館、警察署、市役所、公会堂、図書館、公園通り教会、小樽教会は昔の名残りを残したまゝ同じ場所に建っている。

しかし、何か足りない、その昔あった何かがない、と昔を懐かしみながら長崎屋へ行ってみた。70代、80代と思われる御老体達がゴシャマンとたむろっている広場がある。昔はこんな光景はなかったのにと、忘れた時代にタイムマシンで来た様な思いにかられたのは不思議だった。都通りを歩いてみた。昔はルーフはかかっていたが、通りを行く人々に物足りなさを感じた。活気だ！活気がない！昔は活気があったのだ！！

小樽市は事実上破産都市となっていると把握している。市が経営する病院が患者数激減の為膨大な赤字経営。市の人口激減が続く限り病院の赤字経営は継続するだろうし、市の公共サービスを削減してもこの赤字はなくなる。小樽市にとっては市の繁栄を促す外貨が必要なのだ。したがって刷新たる戦略構想が必至であると思う。しかし、それは市民が島国根性的な考えを捨て、大きなグローバル的な配慮をもって市の弱さ、強さを把握し、赤字の原因を追究し、従来の古い考えに固執せず、根本的に目標を変える必要があると考える。目的はただ一つ。市の活性化である。小樽市役所内の無駄の排除はその内の一つであるが、それ以上に観光による外貨の獲得、侵略的な港湾事業の拡張、人口の増加を促す新興行、交通の基点の獲得等が将来の鍵を握っているものと考えている。私はアメリカは東海岸、カジノ・リゾート市である、ニューヨーク・シティのプレイグランドとして君臨するニュージャージー州アトランティック・シティに在住する事25年、公私共に経験した体験から、小樽市の活性化に次を提言したい：

- 小樽市財政の活性化。無駄を削除する為に部、課の併合。管理職の経営監査と賞罰規約の確立。市職員の年功序列の排除。100%勤務評定とHR (Human Resource)によるプロセスの監督。無駄な4月人事異動の削減－事なかれ主義精神の削減。嘱託職員の待遇改善。米国式病院経営管理方式の採用。港湾部による積極的な船舶寄港誘致。特に船舶寄港に関しては『核なき商業港』などと綺麗ごとを叫ぶのは『井の中の蛙、大海を知らず』如きの現実離れのナンセンスである事を認識し、小樽市の知名度の高揚に尽くすべきだ。
- 新幹線新小樽駅所在地の再検討。近代トンネル採掘技術は東京湾の『海ほたる』海底トンネルの掘削に使用したカッターフェイスに見られる如く、新小樽駅の建設は天神地区の山奥に建設する必要はない。したがって、小樽駅直下、将来の新興行地域、あるいは温泉郷近郊などに直結出来る事を想定した刷新的計画として再考慮

すべきだ。大体に於いて、北海道新幹線基本設計は 37 年前の昭和 48 年、最新のトンネル採掘技術は存在していなかった時代の事である。一昔どころか二昔以前の工業技術を基本に企画されたものに固執するとあっては実に不可解な事である。何を基本に天神地区に新小樽駅の建設を想定したのかが奇怪となる。そこに有力な政治家の固定資産でもあったのかと思わざるを得ない。しかるに最も重要な事は新小樽駅を計画するに当たり、特定の政治家の利潤又は便宜は考慮すべきではない。本州に見られる様な、乗降者の少ない、しかし政治的な理由で駅を設置するなど、これが新幹線駅に関する過去の日本の醜い障害であった - 私の主観ではあるが。

- カジノ誘致。小樽市がやらなければ誰かがやる。この背後には膨大な金塊が潜在しているからだ。ニュージャージー州アトランティック・シティは田舎海岸の貧困町からラスヴェガスと並ぶアメリカ大賭博都市として生まれ変わった。アトランティック・シティ市政権下では市職員、教員、警察官などの所得はアメリカでもトップに上場されている。勿論、賭博は合法化しなければならない。又『カジノ』には犯罪が伴うと言われるが、それは認識不足。現在では少なくともアトランティック・シティにはない。ラスヴェガスにもない。それは強力な CCC (Casino Control Commission - カジノ監督委員会) があってカジノ業界を君臨しているからである。賭博者につきものの賭博癖の悪影響はあるが、それはパチンコの悪癖と類似している。パチンコ屋は何処にでもあるではないか！
- コンベンション・センターの誘致。私は過去 10 年の間、アトランティック・シティを始め、ホノルル、サンフランシスコ、シカゴ、ニューヨーク、フィラデルフィア、オーランド、ニューオリンズ、ラスヴェガス、ワシントンの各都市で開催された諸々の学会に出席の為、各市が誇るコンベンション・センターで何日か過ごした。特にシカゴでの学会は 4 万人のプロフェッショナルを集めての大 Conference, アメリカのコンベンション・センターを有するシカゴ、さすがアメリカのスケールの大きさに圧倒された。しかし重要な事は僅か一週間間に少なくとも数十億円の巨額な外貨（市に落ちた消費額）がシカゴ市に落とされた。この事実は軽視出来ない。コンベンションに参加する人々はその前後を通して観光に没頭する。これを小樽に見合わせてみると、想像を絶する外貨の獲得になるのだ。コンベンション・センターの利用者は医科歯科学会、全国都道府県知事会、各政党大会、諸々の組合大会、諸々の企業団体、大学学長会、ミス・ニッポンページェント、等それは数え切れない。思うのであるが、もし小樽にコンベンション・センターがあったなら、小樽グランド・ホテルは今日も健在してるに違いないと確信している。ちなみにアトランティック・シティコンベンション・センターは過去 50 年、ミス・アメリカページェントの本拠地であった。

この小樽に住み着いた私、ここが私の終着駅である。再びアメリカへ戻ろうと云う気持ちはない。ただ小樽市の市民に望みたい事は、狭い殻から抜け出し、北海道開拓精神を植え付けたクラーク博士の言葉を思い出して頂きたい。クラーク博士が言い残した言葉は：

『Boys! Be Ambitious!』－『少年よ、大志を抱け!』であった。

しかし、私は小樽市の皆さんに叫びたい：
『Citizens of Otaru! Be Ambitious!』－『小樽市の皆さん、大志を抱け!』